

Global Next Leaders Forum 2018 Report



**GLOBAL
NEXTLEADERS
FORUM**

2018年3月
グローバル・
ネクストリーダーズ
フォーラム学生本部

ご挨拶

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部（以下GNLF）は2017年春に新体制にて発足して以来、1年間活動を続けてまいりました。その集大成となるGNLF2018本会議を本年3月に無事終了することができました。これはひとえに、皆様のご支援・ご協力の賜物であり、感謝申し上げます。

弊団体はその設立以来、国際社会において将来的に活躍するであろう、なかにはすでに活躍をしている世界中の大学生たちが一堂に会し、能力を高めあう場として、年一度の学生会議である本会議を実施してまいりました。異なる文化を背景に持つ若い世代の人間たちが、日常生活ではありえない経験を通し互いに刺激しあい、人生のターニングポイントとなる重厚な時間を提供することを一つの目標としております。過去の参加者のみならず、今年度の参加者たちにとっても、本会議が世界に大きな流れを作る一つのきっかけとなることを願ってやみません。

さて、本年度は、グローバルリーダーの創出の前提条件となるであろう「他者理解の精神」を涵養する場として、本会議のプログラムを設計して参りました。弊団体はこれまで年に一度の本会議を途切れることなく開催し、着実に実績を積み重ねてきました。その一方で、私見ではございますが、団体のキャパシティを超えた事業拡大を昨年度にかけて推し進めた影響で、GNLFのアイデンティティとも言える本会議事業の質が低下する事態に陥りました。

来年には10周年を迎え、持続可能な団体運営の体制が求められる中で、こうした状況にしっかりと向き合い、反省し、改善に真摯に取り組むことを意識して、本年度の会頭職を務めた次第でございます。執行代を中心とした尽力により、1年の準備期間の中で行うべき業務内容の明文化、そして団体理念の再構築を前進させることができました。まだ不完全な部分もございますが、財務状況や運営人数に左右されない堅実な運営体制が出来上がってきたと考えております。

改めまして、上記の活動および試みを含むすべてのGNLFの活動は、協賛者・後援者の皆様、講師の先生方を始めとして、多くの方々のご協力の上に成り立っております。

GNLFを代表して、深く感謝申し上げます。

今期GNLFは3月に行われました本会議最終日の報告会を以て終了いたしました。1年にわたって会頭を務めました、私藤田（8期）は3月をもちまして会頭職を9期の林に譲ることとなりました。今後執行代となる現役メンバー、および春の新歓期に入会する新メンバーともに、GNLFに新たな風を呼び込むことでしょう。今後とも、GNLFへの皆様の温かいご指導とご支援を賜れますよう、心よりお願い申し上げます。

平成30年3月

GNLF 2017年度会頭

藤田 創（東京工業大学 生命理工学院 2年）

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム2017報告書

目次

第1部 2017年度GNLF学生本部 組織概要

1. 活動理念 ...4
2. 運営体制 ...5
3. 後援体制 ...6

第2部 GNLF2018本会議 東京大会

1. 開催概要 ...07
2. 参加大学一覧 ...08-09
3. 議題・本会議構成 ...10
4. 各セッション
開会式・基調講演・参加者個人スピーチ ...11
セッション0：レディーファーストにまつわる議論 ...12-13
セッション1：メディアとジェンダー ...14-16
セッション2：ライフコースとジェンダー ...17-18
セッション3：ジェンダー問題の多様性 ...19-21
閉会式・報告会 ...22-23
5. セッション外活動
文化交流会 ...24
観光 ...25

第3部 本会議以外の活動報告

1. GNLF×世界遺産検定「地域を沸かせ！」 ...26

第4部 総括

1. 2017年度GNLF学生本部総括 ...27
2. ご連絡先 ...28
3. 会計報告 ...29

付録：各セッションアンケート質問票 ...30-32

1-1 活動理念

国際社会で活躍したい。

そう望むことは簡単ですが、実現することは容易ではなく、必要な資質を身につけるだけでかなりの困難です。誰しものが世界を股にかけた仕事などできるわけではなく、願っているだけで埋もれていく人も数多くいます。

このような現実に一石を投じるべく、私たちグローバル・ネクストリーダーズ・フォーラムは、グローバルリーダーが活躍する一步を踏み出す場として、毎年初春に1週間程度の期間、本会議を開催しています。グローバルリーダーとは、様々な背景の人と関わりあう国際社会で、一国の代表者として自分のなすべきことを全うし、相互の信頼関係を構築できる人間を指し、たった1週間の本会議は参加される方がそのすべての素質を学べる場にはなり得ないでしょう。

しかし、国際関係に限らずあらゆる対人関係で有用となる、他人との相違を認め合うという能力は、グローバルリーダーに求められるスキルとして最も基本的かつ最も重要なものであり、その獲得は活躍するフィールドを問わず大きな一步となります。グローバル・ネクストリーダーズ・フォーラムの本会議は、この差異を前提に互いを理解し尊重する姿勢を参加者の方に身につけていただく場ということが主眼となっており、次にあげる2つの特徴があります。

1点目は、参加国の多様性です。政治的、経済的影響力の大小に関わらず様々な地域の様々な規模の国の参加者を募ることで、会議での前提が先進国視点、大国視点に寄らないよう綿密に参加国が選定されています。一般的に先進国からの参加者に偏ってしまうことの多い国際会議の中で、グローバル・ネクストリーダーズ・フォーラムは他の国際会議と一線を画しています。自国の代表者として将来を背負っているという自負と責任感に溢れた途上国からの参加者との交流が可能です。

2点目は、日本で開催されるということです。特定の宗教派閥に属さない日本で会議が行われ、日本人学生が会議を主催することで、発言者の属する宗教により発言の軽重が生じることを防げます。また、宗教的原因から参加をためらうことを防ぐこともできます。このような理由から日本での開催により多国間枠組みの維持が安定的に可能となると考えています。

このような特色の結果、参加者の学生は、自身の五感を通じて多種多様な学生とともに毎年変化するテーマについて問題を共有し互いの意見を交わし合うことで、個人レベルでの相互理解を深めることができます。そうした経験をすることで、単なる外国人との個人レベルの付き合いを超えて、様々な国の人と生身で接することで世界から見たときの自身の相対的な立ち位置を知ることができます。これにより、自身の考えを絶対的なものではないと認識することで、異なる意見にも寛容になり、耳を傾けることができるようになります。

さて、本会議の設営を担当している私たちも、本会議が自分が当然視していた価値観を再確認し、居場所を相対化するための場であることは変わらず、参加者、支援者の方々のおかげでこのような素晴らしい学習環境が実現できていることを心に深く刻みながら、会議に関わるすべての人にとってこの会議が自己を見つめ直す契機となり、次に向けた確かな一歩となることを願っています。

2017年6月26日
GNLF第8期・第9期一同
(2017年7月5日更新)

1-2 運営体制

顧問：遠藤貢（東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻、教授）

8期（2017年度執行代）

藤田 創	会頭	東京工業大学生命理工学院2年
田嶋 理彩	副会頭	早稲田大学文化構想学部2年
堀田 みと	副会頭・広報局長	東京大学教養学部2年
築島 綾音	財務局長	東京大学教養学部2年
木山 祐輔	プログラム局長	東京大学教養学部2年
竹内 祐稀	メンバーシップ局長	東京大学教養学部2年
森上 佳媛		東京大学教養学部2年

9期（2018年度執行代）

伊藤 舜将		東京大学教養学部2年
日下部紗伎		東京大学教養学部2年
倉石 東那		津田塾大学学芸学部1年
合田 智揮		東京大学教養学部1年
新栞 宏美		東京大学教養学部2年
末尾 陽奈		東京大学教養学部1年
高木 友貴		東京大学教養学部1年
田村 珠理		東京大学教養学部1年
萩原 雅之		国際基督教大学教養学部1年
林 航平		東京大学教養学部1年

1-3 後援体制

特別後援

読賣新聞

THE YOMIURI SHIMBUN

助成



協賛



寄付



後援



在日チュニジア
共和国大使館

2-1 開催概要

期間

2018年2月22日(到着日)～2018年3月2日(出発日)

開催地

東京

宿泊地

2018年2月22日～2018年2月27日：国立オリンピック記念青少年総合センター

2018年2月28日～2018年3月1日：鳳明館森川別館

会場

2018年2月23日：NATULUCK飯田橋東口駅前店 4F大会議室

2018年2月25日：原宿スペース

2018年3月1日：東京大学伊藤国際学術研究センター ギャラリー1

上記以外の日程：国立オリンピック記念青少年総合センター 研修室

主催

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部

参加国・地域

>既存参加国・地域

ブラジル・ブルガリア・中国・ハンガリー・日本・キルギス・メキシコ・パキスタン・シンガポール・チュニジア(10ヶ国)

>新規参加国・地域

フランス・スロバキア・台湾(3ヶ国)

参加人数

本部運営委員：17名

日本人学生：6名

海外学生：各国最大3名ずつ、計23名

一部参加国の教員：5名(ブラジル・ブルガリア・キルギス・スロバキア・チュニジア)

計49名

2-2 参加大学一覧

>既存参加国・地域

ブラジル：サンパウロ大学

ブルガリア：国立ソフィア総合経済大学

ハンガリー：ブダペストビジネススクール

日本：東京大学、慶應義塾大学、横浜薬科大学

キルギス：キルギス国立大学

メキシコ：メキシコ国立自治大学

パキスタン：インスティテュート・オブ・ビジネスアドミニストレーション・カラチ

シンガポール：シンガポール国立大学

チュニジア：チュニス エル・マナール大学

>新規参加国・地域

フランス：ボルドー政治学院

スロバキア：J.セリエ大学コマルノ

台湾：国立台北大学

2-3 議題・本会議構成

議題

ジェンダー（Gender Equality）

議題概要

「社会的な性」と規定されることの多いジェンダー。日本国憲法でも、世界人権宣言でも性の平等は高らかに謳われているにも関わらず、昇進の速度から災害時の致死率、性的マイノリティへの差別から「男らしさ・女らしさ」の規範を強化する私たちの普段の言動に至るまで、ジェンダー間の不平等な力関係やジェンダーは二元的であるとする前提が現実世界で大きな力を持っています。

本会議ではジェンダーの視点からミクロ・マクロ双方のレベルで様々な社会問題を扱い、参加者個人の価値観を問い直します。



議題設定理由

1. 2017年度におけるジェンダー

- 国連の発表したSDGsの17の主要ターゲットのうちのひとつはジェンダー平等
- 「ジェンダーと開発」「軍事とジェンダー」など、さまざまな国際問題をジェンダーと関連付けて議論する潮流
- 一方で「女性の社会進出度」などの国際比較を中心とした学校現場等での表面的なインプット

2. GNLfがジェンダーを本会議のテーマとして扱うことの意義

- 従来の多国間枠組みを生かす：
自明としてきた自分のジェンダー観がいかに社会や文化に規定されたものだったか問い直す装置として本会議が機能する。
- 日本での開催：
日本社会固有の女性のキャリアに関する問題や日本文化の中での性差の表象についてなど、日本でしかできない学びを提供する。
- 大学生の参加：
将来の自らの人生上の選択を左右しうるテーマであり、偏見に対峙する様々なアクターとの出会いを経験することができる。

3. テーマを通じ参加者に期待する成果

- ジェンダーというテーマを通じて他者との類似・相違を知り、自らの考え方を相対化すること
- 自分とは違う考え方や、そういった立場から考える術を知ったひととなり、グローバル・リーダーに不可欠な他者理解の精神を持つ一助・きっかけとなること

本会議の構成

2018年の本会議は、テーマの性質上例年に比べて個々人の意見の交換に重きを置いたプログラム設計であった。

そもそも「ジェンダー観」は、国や地域一般の文化に加えて、個人の育った環境や経験に強く影響されるものである。また、国連などの場で語られ、共通解的なものが形成されてきているからこそ、学生がある種主観的、非学術的ともいえる視点からジェンダーに関わる赤裸々な意見を交換する機会は、マクロな解決策を共同で考えるよりも有意義であると考えた。

以上のことから、プログラムの最初に「自分がジェンダーに関して考えることについて」、最後に「プログラムを通して自分が変わったこと・変わらなかったことについて」を参加者全員が個人発表する場を設け、間に様々な視点から意見を交換する4つのセッションを配置した。

個人スピーチ①：ジェンダーに関して

セッション0：レディーファーストに関する議論

セッション1：メディアとジェンダー

セッション2：ライフコースとジェンダー

セッション3：ジェンダーと多様な考え方

個人スピーチ②：本会議を通じて

セッション0：文化としてのレディーファーストに関する全体討論

美しい伝統か、性差別か。レディーファーストを題材に自由に意見を交わし、賛成・反対双方の価値観を知る。

セッション2：人生選択とジェンダー

自身のこれまでの人生の振り返り、講演、自らの将来についてのフリートークを通じて、人生における選択にジェンダー観が与える影響を相対化する。

セッション1：メディアとジェンダー

社会規範を再生産するメディア。CM作製体験・講演・ケーススタディにより広告業を中心としたメディアが、多様化する価値観の中でどうあるべきか考える。

セッション3：ジェンダーと多様な考え

ジェンダーに関わる問題のケーススタディ。3つの問題から最も議論すべきものを選ぶところから始め、問題の所在、解決策を議論する。

2-4-1 開会式・基調講演・意見表明



基調講演者紹介

永峰 好美 様

読売新聞東京本社編集委員

1979年国際基督教大学教養学部卒業後、読売新聞社に入社。女性・子ども、高齢者、外国人問題、労働・雇用、消費者運動、NGO、国際協力など幅広いテーマで取材、50カ国以上を訪問。2000年より解説部次長。2012年6月、読売新聞東京本社編集委員に就任。

本会議初日となる2月23日には、飯田橋の貸会議室にて

- ・ 開会宣言とアイスブレイク
- ・ 読売新聞社より、永峰好美様による基調講演
- ・ 参加者に事前課題として課していたジェンダーに関するショートスピーチが行われた。

最初に17年度会頭の藤田創より挨拶があり、次にプログラム局長の木山祐輔より会議全体のプログラム構成の意図について説明があった。

アイスブレイクでは名前にまつわる簡単なゲームの後全員が軽い自己紹介を交わし、テーブルに分かれて5-6人のメンバーの共通点を探すゲームを行った。

午後には読売新聞社より、基調講演者として永峰好美様をお招きし、約1時間半にわたりご講演頂いた。

ご自身の就職時の女性の社会進出状況や、ジャーナリストとしての取材で触れたジェンダー問題など、永峰様の経験をもとにしたお話を頂いた。また、その他国内外のジェンダー・セクシュアリティにまつわる幅広いトピックを提供していただき、約1週間の本会議の良い出発点となった。

その後の個人スピーチでは、Show & Tell形式でランダムに指名された参加者が「ジェンダーにまつわること」をテーマに自由にショートスピーチを行った。その国の民話に典型的な女性の役割、国内の農村社会と家父長制など、さまざまな観点やスケールでジェンダー問題が語られた。テーマを誘導しないよう敢えて自由度を高く設定したため、中には人によっては納得できないようなトピックもあった様子だった。しかし、その後の議論においても似たような考えを持つ人、そうでない人を見つけた参加者も見受けられ、その点では成功だったといえる。



2-4-2 セッション0：レディーファースト文化をめぐる議論



ファシリテーター紹介

Maja Liechti さん

東京大学教養学部PEAK生 International Program on Japan in East Asia

スイス出身。

アニメ鑑賞から日本文化に興味を持ち、高校の語学研修で日本を訪問、日本で学ぶ意欲を高める。大学進学の際に日本政府主導の英語研修プログラム(Global 30 program)の存在を知り、日本に留学。

セッションの目的

「レディーファースト」という文化・慣習は現代社会では広く知られ、実践もされているが、このような明文化されていない慣習は国・地域や世代、あるいは性別によっても捉え方が異なっていると考えられる。

グローバル化が進んだ現代社会でのジェンダー観はどのように共有されているのか、あるいは相違しているのかを炙り出す装置として「レディーファーストをどう考えるか」というトピックを用いることとした。

本会議セッションの幕開けにあたる本セッションは、誰もが聞いたことのある「レディーファースト」をきっかけにして価値観や議論の前提の違いをブレインストーミングのようにして忌憚なく討論し、論点の列挙・各参加者の視座の違いの把握・他のセッションの議論への導入の機会とすることを目的として設定した。

セッション内容

国立オリンピック記念青少年総合センターの研修室にて、2月24日の午前中に行われた。

部屋をYES/NOサイドに二分し、1. 自国にレディーファーストは根づいたものとして存在するか？、2. レディーファースト

の文化に賛成するか反対するか？の2つの問いについて両サイドに分かれ、Majaさんのファシリテーションのもと討論を行った。

1. の問いに対して、参加者がほぼはっきりと東～東南アジア出身者（Noサイド）とその他南アジア・アフリカ・ヨーロッパ・中南米出身者（Yesサイド）に分かれた。「女性全部が身体的・経済的に弱いものであるという前提が働いているのがおかしい」というNoサイドに対して、「レディーファーストの実践は誰に強いられるのでもないたって普通のことだ」というYesサイドの意見も根強かった。だが、議論を進めていくうちに、どちらのサイドも「必要な時に必要な人に助けの手が伸べられる社会であるべきだ（＝"Needy First"）」という認識を持っていることがわかり、Yesサイドからは「助けを必要としているあらゆる人を助ける精神・文化の総称が『Ladies First』なのだ」という興味深い意見が聞かれた。



ここで全体の進行はゆるやかに2.の問いに移行し、助け合いの文化を『Ladies First』と呼ぶことは適切なのか否かを中心に討論が展開された。助けを必要とする者・弱者を”Ladies”と総称するところに過度の一般化が働いているという意見、そもそも男女の二分論で語ること自体が間違っているのではないか、字面だけを見たら女性だけが優遇されるように取れてしまうから表現を変えるべきだという意見がNoサイドから上がる一方で、Yesサイドからは根本の意識が共有されていれば表現は変えずとも問題がないという意見が出た。議論は社会規範の形成や影響力にまで広がりを見せつつ白熱し、思考の土台、考え方の大小様々な差異が明らかになった。



目的の達成度評価・反省点

議論は卑近な例を出発点にして社会規範の形成にまでスケールが広がり、様々な視覚・スケールで展開したといえる。両サイド間の対話は途切れることなく続き、なおかつファシリテーターのMajaさんが主題を外れないよう意見をまとめ、問いを投げかけてくれたことで論点を変えつつも深い議論ができた。ファシリテーション技術の素晴らしさは参加者アンケートでも数多く挙げられた点であり、よりよい議論の進行のためによいファシリテーターの導入が不可欠であることの強い示唆となっていると言えよう。

活発な議論の結果、

- レディーファーストを切り口とした「ジェンダー観」の相違
- 各参加者の発言の積極性
- 各参加者の思考の一般/抽象の度合いや価値観の特徴

が初日の初めのセッションの時点でかなり明るみになることになり、その意味では当初設定した目的は高いレベルで達成されたといえる。一方で、中には自らの価値観、生まれ育った環境を疑ったり相対化したりすることなく思ったままに発言する参加者もあり、悪意なき発言とは言えど心中で強く反対したり反感を覚えた参加者も散見された。

様々なバックグラウンドをもつ者同士が集まって、時には心地良いだけではない会話・議論を交わすのも多国籍のGNLFならではの体験ともいえるが、主題・質問詳細・ファシリテーションなどは相当気を遣って作りこまないと、思わぬ参加者同士の不和を引き起こす可能性があることには今後も配慮し続けねばならないであろう。

2-4-3 セッション1：メディアとジェンダー



講演者紹介

梅田 悟司 様

株式会社電通 プロモーション・デザイン局 元クリエイティブ・ディレクター

上智大学大学院 理工学研究科修了。広告制作の傍ら、製品開発、雑誌連載、アーティストへの楽曲提供など幅広く活動。カンヌライオンズ、グッドデザイン賞、観光庁長官表彰など国内外30以上の賞を受ける。CM総合研究所が選ぶコピーライターランキングトップ10に2014年/2015年連続選出。

セッションの目的

マスメディアは人々の抱くステレオタイプや社会規範を増強させてしまうという点で多大な影響力を持っている。その中でもCMはそれを見ることを意図していなくても、自然と目に入ってしまうという点で影響力が大きい。そんなCMに関して、日本では、人々の価値観の多様化とSNSの普及によって、昨今ジェンダー表現をめぐる炎上が相次いでいる。この現象に対して、ジェンダーに配慮したメディアのあり方を模索する上で不可欠だと考える人もいれば、炎上が表現の自由を狭めてしまうと懸念する人もいるなど、賛否両論がある。

本セッションの目的は、CM作成及び講演・ケーススタディを通じ、利潤と公共性のジレンマに陥る広告がどのようにあるべきかを考えることにある。この過程で、誰をも傷つけない表現が難しい中で、どのような表現がなされるべきかという答えのない問題に向き合うこと、また他者に対する想像力の必要性を学ぶことを狙いとした。

セッション内容

・セッションーCM作成ー

セッションは二つの部分から成る。まず一つ目は、参加者自身によるテレビCMの作成である。参加者を5グループに分

け、それぞれ1.洗剤、2.コーヒー、3.チョコレート、4.スーパーマーケット、5.家、というお題を与えてそれを最大限に売るためのCM作成を、まず初めに個人で行った。その際、人を最低1人登場させること、とにかくお題のものをアピールすることの2点に注意してもらった。

次に個々人の案を各グループ内で共有し、なぜその人を起用したのか、作品内に各国の特徴が現れているか、登場人物のジェンダーを入れ替えたらどう感じるかなど、作品内に潜在しうるジェンダーの観点からディスカッションを行った。その後グループ内で一つ、起こりうるジェンダー問題に配慮して、お題のものを最大限売るためのCMを最終成果物として作成した。

働く女性とそれを助ける男性という、一般的なジェンダー役割を反転させた作品、様々な人物を登場させることでジェンダー観を固定させない作品、そして男女が商品を取り合うというどちらからも需要が高いことを示す作品など、問題への配慮が見られる個性的な作品が寸劇や動画を通して発表された。

・講演

現役のクリエイティブディレクターとしてご活躍されている梅田悟司氏を招き、広

告製作者が持つべきジェンダー観についてご講演いただいた。

まず、ジェンダー観においては、モラルが重要だが、それが根付いていない日本社会においてはルールでモラルを醸成していく必要があることが指摘された。

次に、メディア背景として広告という誰もの目に触れるメディアとしての特異性が指摘された。そして、制作プロセスとして企画→決済→製作→露出の過程における表現チェックの仕組みを説明いただいた。

最後に、広告製作者が持つべき視点として、想像力と想像力の共存・身近な人を想定したセルフチェック・炎上に蓋をせず議論する姿勢があげられた。質疑応答では、LGBTQなど依然として反発も大きい分野での広告のあり方や、ターゲティングの精度上昇により、消費者個々人に最適な情報が提供される時代におけるメディアのあり方など、活発な議論が見られた。

参加者には、個人としてこうした表現を差別的だと思うかと、CMは公開中止されるべきか否かについて小グループに分かれ議論してもらった。最後に各班に議論の内容をまとめて発表してもらったところ、ほとんどの人が問題となった表現をジョークであると捉えていた。このCMが公開中止になるべきか否かについては、公開中止にするほど差別的な描写があるわけではないという意見が見られた。一方で、ジョークとして受け取らない人も現実に存在するのだからそうしたマイノリティにも配慮するべきだ、広告はより個人の視点を捉えていくべきだという意見も共有された。セッション最後には、個人も強い発言力を持っていく時代において、広告で見られたような他者への配慮は将来のグローバルリーダーとなり影響力を持つ私たちも認識する必要があるということに参加者に周知した。

目的の達成度評価・反省点

CM作成部分においては、参加者皆が意欲的に楽しんでおり、利潤と表現の問題を重視する人もいた一方で、アカデミックな観点で見ると実りがなかったなどの意見もあった。楽しみながら、商業的目的を満たす一方で万人に受容される広告作りの難しさを体験してもらうという目的は達成されたが、初めからジェンダーに配慮した案を作る参加者が多かったため、自身の潜在的ジェンダー意識に気づくという目標の達成は不十分であったと感じる。またグループディスカッション部分での話し合いをメインの学びとしてほしかったものの、議論のポイントが十分には理解されないままに成果物の製作にほとんどの時間を費やしていた。議論の誘導をより分かりやすく伝える



・ケーススタディ

日本におけるCM炎上とその是非を考える簡単なディスカッションを行った。日本の化粧品会社のCMの中で登場した「25歳以上は女の子じゃない」「私たちはもう可愛いという武器を持っていない」「もうちやほやされない」表現が、女性差別的だと炎上し、公開中止されたケースを扱った。

必要があったと、司会の難しさを味わった。

講演においては、広告における表現と需要とのジレンマが参加者に共有できたことがアンケートを通じてうかがえる。その点で、講演の主要目的は達成されたと言える。また、強調されていた他者の立場に想像力を働かせる力は一人間として、そして社会をより良い方向へと導くグローバルリーダーとして不可欠なものであり参加者にとってメッセージ性あるものとなった。ただ、反省点も残る。まず、講演内容がわかりやすさに重きをおくあまり、参加者にとって新たな知見を十分に与えられたとは言えない点である。「誰をも傷つけない表現はあるのか」という点に対し、もう少し講演者の実体験や考えに基づく説明がなされてほしかったと思う。この点をもう少し打ち合わせの際に強調するべきであっただろう。また、止むを得ず逐次通訳の形をとったが、いくら通訳が上手くてもやはり時間の尺が2倍になってしまうことで冗長に感じてしまう人もいたようだ。来年度はこの点も意識し、英語使用が可能な講演者を呼びたい。

ケーススタディにおいては、実際起こった議論を追体験することで広告のあり方を考える一助になっただろう。このプロセスを通じ、すべての人を傷つけない表現が難しいこと、その上で表現の是非をめぐって議論し続け、より良い表現を考えていくことが大切だという認識が共有された。反省点としては、自己を再考するには自分のアイデンティティが深く関わる問題、すなわち自分ごととして捉えられる問題をケースとして扱う必要があると考え、身近なCMを対象に選んだが、予想とは裏腹に個々人のCMに対する意見があまり割れなかった

ことである。それゆえに、他者の見方を知り自分の視座を相対化するという目的があまり達成できなかった。この改善点として、何らかの点で多くの人とは異なる意見やアイデンティティを持つ人の話を実際に聞くことがあげられる。見えない他人の意見に想像力を働かせることは重要だが、実際の対話が個々人に自明とする価値観に対する真摯な再考を迫るであろう。その点、自分の当たり前とは全く異なる価値観と意見に面と向かって対峙すること、そしてマイノリティの持つ当事者性を身をもって認識することが必要であったと考える。

セッション責任者所感

他者に対して想像力を持つというのはとても難しい。今回のプログラムは参加者にその必要性を伝えるものとはなったが、実際に参加者が今後もこの難しさに真摯に向き合っていくほどの行動変容を起こせたかという点に疑問を抱く。最後のケーススタディの題材として、自らの価値観と照らし合わせるために身近な問題を選んだが、あまり価値観の差が出なかったのは検討不足であったかもしれない。その点悔やまれる点も多いが、参加者にとって他者への想像力・共感力の必要性という今回伝えたメッセージと今後経ていくであろう様々な経験が繋がって、その重要性により自覚的になることで、想像力・共感力の獲得に向かってさらに尽力して欲しいと思う。

2-4-4 セッション2：ライフコースとジェンダー



講演者紹介

児玉 都 様

デロイトトーマツコンサルティング合同会社 シニアコンサルタント

国際基督教大学教養学部卒業後、ベンチャー企業に入社。外資系組織人事コンサルティング会社に転職後、パートナーの転勤で退職。2人の娘を出産、育児をしながらMBAを取得。2015年より現職、日本の大企業・自治体等のダイバーシティ推進、働き方改革支援に従事。

セッションの目的

時代・世代を問わず、個人個人の人生のさまざまな段階における選択には知らず知らずのうちにその時代、その社会の「当たり前」が刷り込まれている。特にジェンダー観がかかわる場合、自分で好ましいと思っているつもりの選択も実は「男性はかくあるべき」「女性だから〇〇はしない」といった周囲からの影響を受けている可能性もあり、それは実践上の障壁となることもある。

同じ国の同じ大学を中心とした日常のコミュニティの中では意識されにくいこのテーマについて、様々な国から集った学生同士が話し合うことは意義のあることだと考えた。

参加者個人が「ジェンダー」の観点から、これまでの人生や現在の環境、自分の考え方を見つめ直し、ジェンダーに関連する問題がいかに人生における選択に影響を及ぼしているかを再考するようにすることが当セッションの目的である。

セッション内容

セッション2は大きく3つの部分に分けられる。

1. 学生同士の「これまでの自分の人生とジェンダー」に関するディスカッション

最初に、社会の中のとある層が権利や活

動の場を拡大するための運動のひとつとしてフェミニズム運動を概括した後、理想としては人生のあらゆる選択は自由であるべきなのにジェンダー規範から自由でない側面がある、という議論の前提を共有した。

そののちに参加学生30名を3グループに分け、GNLFの運営メンバーの自分のライフヒストリーの紹介を皮切りに、自分の経験や家族について話をジェンダーの観点から話し、意見しあうディスカッションを行った。

参加者は運営の話聞いて日本の事情を特異なものとして驚いたり、翻って自分の家族は特に環境・理解の点で恵まれていることを再認識したりした様子だった。

2. 児玉都様をお招きしての講演会

デロイトトーマツコンサルティング勤務、2児の母でもある児玉様にご登壇いただき、ご自身の経験や当時の葛藤をベースに日本の女性の人生における選択や社会規範についてご講演いただいた。講演最中から学生が自由に発言できる形態をとり、

- 女性の転職は受け入れられるようになってきているか
- ガラスの天井を破る鎬矢に自分なるうと思うかどうか
- 日本と同様の状況は海外にもあるのか
- Gender Equality達成を規定した法に基づ

いて社会が動いているのかどうか

- 職場における女性雇用を達成するためのアファーマティブアクションの是非
- 児玉様自身が今後どのように人生を設計しようと考えているか

などの質疑応答、議論が活発に行われた。特にアファーマティブアクションに関する議論は複数の学生を巻き込んで白熱し、日本の事情だけでなく各人の考え方の相違も浮き彫りにするような時間となった。



3. 「これからの自分の人生とジェンダー」に関するフリートーク

児玉様の講演で日本の事情や、職業選択、結婚・出産・子育てなどにまつわる葛藤や困難について理解を深めたところで、最後に学生たちは卒業後の自分たちの生活や選択について自由に話し合った。

「自分は20代で出産したいが国全体の風潮は違う」などのマクロな話から、「個人的にこういうことは嫌だ」などの具体的な話まで幅広い希望や不安の声が聞かれた。

目的の達成度評価・反省点

「他の国の人と、他国の事情やほかの人の考え方に触れながら自分のこれからについて話すことができたのが楽しかった」

「日本の事情を深く知ることができた」等の声が多く聞かれ、当セッションは参加者にとって貴重な議論の機会となったといえる。

一方で「議論の出発点があまりにもベーシックすぎて新しい気付きはなかった」という意見が見られたり、自身の周囲の具体例の性質を国柄と混同したまま議論を進める参加者とそうでない参加者で論点や話のスケールが噛み合わなかったりする場面もあった。議論の土台を深め、洗練させきれなかった点は否めない。

議論の方向性を誘導してしまう可能性との兼ね合いを見極めながら、参加者が同じ知識レベル・あるいは前提の認識のもとに話し合えるように導入部をつくりこむ努力により次年度のプログラムはより実り多いものになるだろう。

セッション責任者所感

「ジェンダー」という、国際的にも学問的にも広く深く論じられているテーマでありながら、個人の主観や経験に多くを依拠するセッション設計としたのは一種の賭けであり、当然そこには賛否両論があった。

だが、文化的・宗教的背景の違うもの学生同士が大勢集まって自らの立ち位置を再確認し、社会の大きな問題とともに自らのこれからの歩み方にも想いを馳せるような機会となったことを確信している。

2-4-5 セッション3：ジェンダーと多様な考え方

セッションの目的

ジェンダーの平等というテーマは、今では国連や行政が取り組むべき問題として認識され、以前は表出していなかったジェンダーの不平等性に関連したニュースなども増えている。このようにこれまでのジェンダー観を問題視する風潮が強まることで、これから男性と女性の間でのジェンダーの格差が小さくなることが期待できる一方で、様々な問題がまだ解決の見通しが立っていない。これは、これまでの状況をジェンダーという観点でより平等に近づけようとする過程で、代わりに犠牲になる価値があるからである。

様々な価値に優先順位をつけるものである価値観は個人により様々であるため、ジェンダー平等をとより重要視する人もいれば、犠牲を生んでまでジェンダー平等を実現することを疑問視する人もいる。このような価値観はこれまでの人生経験により育まれてきたものなので、生まれ育った国や文化の様々な参加者と互いの価値観を共有することは自分の価値観を捉え直す上で非常に重要だと考えた。

具体的な事例について設定された問いに答える過程で互いの価値観を共有し、さらにグローバルリーダーとして多様な価値観を持った人とお互いに尊重し理解し合えるように議論を進めるということがこのセッションの目的である。

セッション内容

セッションは3つの部分に分かれる。

1. 個人的な価値観に基づいて話し合うトピックを決めるグループディスカッション

A. Time's Up Now運動について

ハリウッドセレブティたちが業界に根強くのこるセクハラに対しての抗議を示すため、授賞式で黒い服や指定のバッジをつけるTime's Up Now運動について。



- ・こういった運動は往々にして同調圧力を生じさせ、実際黒い服を着なかった受賞者がセクハラ容認派と曲解され非難される自体も起きた。セクハラ反対という協調的な集団行動を取るために個人のファッションの自由が侵害されるのは正当化できるか？
- ・そもそも授賞式の政治利用自体がよしとはされない中で、Time's Up Now運動だけは別だというのに十分な根拠があるか？

自分がジェンダーに関連した問題の中でも具体的にどのような問題をテーマとして扱いたいかという選択には、参加者それぞれの価値観の違いが現れると考えた。そのため、まずはじめにどのテーマをグループのテーマにするかをじっくり時間をかけて話し合いグループメンバーどうしの理解を深めた。

テーマは3つの中から選ぶように指示を出した。話し合いの過程では歴史的背景や自国の状態を話し合いつつも最終的にはお互いの主張を組んだ流れでテーマを選択することができていた。

B. 東京大学の女子学生家賃補助制度について

東京大学が地方出身の女子学生にのみ家庭の収入に関わらず家賃を補助する制度を導入し、一躍論争的となった。一方東京芸術大学でも特に音楽学科などでは顕著な男女比の差があるにもかかわらず、男女比を改善するためのアファーマティブアクションは取られていない。

- ・東京芸術大学でも東京大学と同様に男女比を改善するためのアファーマティブアクションが取られたら、東京大学の家賃補助制度は完全に非難をうけないか？仮に受けないのだとしたら、どうして東京芸術大学では家賃補助制度が導入されないのか。
- ・東京大学が男女比を改善する必要があるのに、東京芸術大学ではその必要がないのはどうしてか？就職や労働の際影響しにくい芸術分野は女性向きであるというようなジェンダー規範の影響があると思うか？

2. 選択したトピックについて問題の構造を一般化して解決策を模索する

各トピックについて、類似した問題などと構造を比較することで問題についての理解をさらに深めた。日本でのジェンダー問題全般への対応の遅れに対する疑問から歴史的背景に話が及んだり、芸術分野への固定観念から自分たちの幼少期の環境を共有するなどグループによりさまざまな展開を見せた。

C. フランスのペア立候補制について

フランスの県議会では、議会の男性政治家と女性政治家の人数を同数にするために1人ずつで立候補するのではなく、男女のペアで初めて立候補が可能になるような制度が導入された。各政党に男女同数の政治家を擁立するよう勧告し、従わなかった場合ペナルティを課すシステムが以前に導入されていたが、その場合には女性政治家率は26.9%と効果が認められなかった。



- ・ペア立候補制では、被選挙者が自分だけの能力に応じて平等に選出されるという平等性が失われている。被選挙者の平等性と県議会内の男女政治家比率で後者の方が優先されているという事実についてどう感じるか？
- ・これが政治の分野でなく学問(入学試験など)や労働(入社試験など)でも同様の制度が導入されたらどう感じるか？

3. 話し合ったことを集約してプレゼンテーション

実際行われたプレゼンテーションのうち、1つの概略を紹介する。

- ・教育におけるアファーマティブアクションと政治におけるアファーマティブアクションの比較について

教育においても政治においてもアファーマティブアクションは機能していない。教育においてはトップダウン式のアファーマティブアクションが採用されていることが問題で、幼児教育など幼少期の教育を見直

すことで社会の構造を変えることが必要である。一方政治においてもクォータ制は機能していないため社会の構造を変えることが必要であるが、民主主義の上では男女比が直接的に政治的影響力に関係するということが教育との違いである。難しいのは、人々の考え方をを変えるためには社会構造を変えないといけないが、社会構造を変えるために人々の考え方を変えないといけないということである。

他のグループも「そもそもジェンダーの平等の概念が人によって異なる」「日本の大学の男女比はジェンダー規範だけでなく社会構造的な要因もあるのではないか」など提示した問題を深く掘り下げた結論が得られた。

目的の達成度評価・反省点

「3つのトピックから選択する方式だったため多様な価値観に触れられた上、グループごとでバラバラのトピックについて話していたため成果が大きかった」「自国の状況からしかジェンダーの問題を考えたことがなかったが、GNLFのおかげで問題を広く捉えることができるようになった」などの意見が聞かれ、白熱した議論によりお互いの価値観の違いについてよく知ることができたと感じている参加者が多くいた。そのため、セッションの目的自体はある程度達成したと感じている。

しかし、セッションの内容面や構成面でいくつか課題を残してしまった。内容面については、セッション担当者である自分がジェンダー問題について偏った認識をしてしまっていて、一部の参加者からは「アフーマティブアクションなどが自分の国では縁遠い話で主観的に考えることができ



なかった」という意見があった。3つのトピックについてはもう少し偏りがないように選択するべきだったと感じている。

また、参加者に情報を提示する際自分の考えを交えないで伝えようということ意識して各トピックについて完結に説明した記事を読む形式にしたのだが、この形式ではセッション時間中に議論をする上で十分な情報を得るのが難しかったと感じた参加者もいた。これらの問題点のせいで参加者の間で議論に参加できる度合いに差が生じてしまっていた。

次年度のプログラム策定の際には、

- 各国での問題認識程度を探り、その穴を埋めるための入念な事前課題
- 情報を伝えるための方法の慎重な選択がプログラムのクオリティを上げるためには欠かせない。

セッション責任者所感

セッションの第一目的がジェンダーの問題についての理解を深めることではなく、お互いの価値観の違いに気づくことだったため、複数の価値の対立を含んだトピックを用意した。その結果トピックに偏りが生じてしまい一部の参加者に不満を感じさせてしまったことは否めない。ただほとんどの参加者が「セッションを通じて多様な価値観にふれた」と感じているので、GNLFだからこそできるセッションを作ることができたと考えている。

2-4-6 閉会式・報告会



報告会の次第は以下の通りである。

- 会頭挨拶
- スポンサー紹介
- 読売新聞社・服部様によるスピーチ
- 本会議総括
- 参加者代表（5名）によるスピーチ
- 参加証授与
- 教授からのコメント

冒頭の会頭挨拶では、今回のテーマが従来と異なり、他者理解の必要性を喚起するものであり、国民性よりも個人の価値観に焦点を当てることを目的としてきたことが触れられた。またドイツの社会学者 M. ウェーバーが提唱した「価値自由（自分がどのような価値観に縛られているかを知覚・意識すること）」の原則が、ジェンダー問題を考える際に鍵となることについて言及がなされた。

スポンサー紹介の後、特別後援をいただいている読売新聞社・The Japan Newsより、読売新聞社 編集委員の服部 真様からお言葉を頂戴した。直近に行ったノルウェーの首相へのインタビューの内容を交えながら、ヨーロッパにおけるジェンダー問題の潮流についてお話いただいた。

本会議総括ののち、参加者による投票によって選ばれた参加者代表5名による

スピーチが行われた。

参加者代表（5名）によるスピーチから抜粋した内容は以下の通りである。

—それぞれのセッションは、すでに時代遅れであるべきはずのレディーファースト文化や、発信するメッセージに対してメディアが負うべき社会的責任などについて問題提起し、私に新たな考えをもたらしてくれた。

—GNLFの参加者が似たようなジェンダーに関する経験をしているために私たちが一緒に参画し、建設的な解決策を見つけることが重要である。単にジェンダー論を読んだり、他国の文化を観察するだけでは解決策は見つからないという結論に至った。解決策を考える前に、多様な価値観を理解するための経験をすることが重要であり、私はそれをGNLFで得ることが出来た。



—私は今回の会議で参加している男性陣が女性と同じように男女平等を実現しようとしていることに嬉しく思った。また、レディースファーストの文化規範が構造的な不平等に由来しているが、多くの男性は尊敬の念を込めてレディースファーストを行っていることを学んだ。

—セッションすべてが相互に関連し合っており、全員の議論への熱心な貢献によって一番の学びが得られたと確信している。ここに来た参加国のことをより知れたこと、例え多くの文化的違いがあっても私達は似たような問題を抱え、達成の仕方は違っても同じ目標に向かえると分かったことは、期待をはるかに超えていた。

—運営スタッフが主導して行った3つ目のセッションや、日本のメディアを取り巻く状況、日本の働く女性がおかれている立場に関する講演は、このフォーラムに参加しなければきっと触れることのなかった事柄だった。

スピーチ後は、参加証授与と教授によるスピーチが行われ、その後無事閉会した。閉会後も来賓、参加者、OB・OGの間での話に花が咲き、終始和やかなムードで幕を閉じた。



2-5-1 文化交流会

GNLF本会議恒例となっている文化交流会は、各国参加者が自国の食べ物や飲み物、民族衣装などを持ち寄り、自国の紹介プレゼンを行い、踊ったり喋ったり写真を撮ったりと思い思いに過ごすパーティである。

今年度は、原宿駅から徒歩数分の原宿スペースというフリースペースを貸し切り、午前のセッションから衣装替え、午後の文化交流会までを通して過ごすというスケジュールだった。移動のロスが減らすことができた一方、丸一日同じ場所で過ごすことにより生じたデメリットとしては

- 着替え場所が確保できず、時間ごとにフリースペース入口を閉め切って男女別に着替えることとした結果、屋外で漬さなければならない時間が発生したこと。
- セッション用、パーティ用に別々の設営が必要となり、なおかつその負担が映像・音響機器を扱うことのできるメンバーに集中してしまったこと。
- 参加者はセッションの準備に加えて文化交流会用の荷物も朝から持ち運ぶことになり、朝の準備の煩雑さ、撤収時の忘れ物の多さがネックとなったこと。



が挙げられる。文化交流会前の着替え場所の確保は必須であること、可能な限り宿に近く荷物を減らすことのできる場所が望ましいことを念頭に、次回は早めの文化交流会の日程決定と会場の確保を行う必要があるだろう。

パーティの前半は、国のプレゼンで自国の音楽やみんなで踊ることのできるダンスを紹介する国もあり、終始和やかな雰囲気に進んだ。しかし、前年に引き続き各国プレゼンのタイムキープが課題として残った。終盤の国のプレゼン中にはすでに試食や談笑を始めてしまっている参加者も見られ、運営がマイクをとって注意を促す場面も見られた。食事の準備の時間をパーティ中盤に設ける、タイムキープを平等・正確に行うなどの工夫が必要となるだろう。

後半は参加者が会場内に配置された各国のテーブルを自由に行き来し、お菓子や軽食を紹介し合ったり、民族衣装を着せ合ったりして写真を撮ったりしていた。様々に改善点が見出されたとはいえ、それまでの日程で話す機会の少なかった他国のメンバーと話し、GNLFがあってこそ集った国の学生・教授同士が一つの輪になって歌い踊った交流会は確実に本会議のハイライトのひとつである。



2-5-2 東京観光

参加者は思い思いの行先を設定した。浅草～押上エリア、お台場、秋葉原、谷根千、明治神宮や上野の博物館など、東京を知っている程度によってさまざまなルートを通り、楽しんでいる様子だった。秋葉原を訪れた一行の中には、街にあふれる「萌えキャラ」の絵に「男性から見た理想的な女性性のひとつの姿」の一種の異様さを感じた参加者もいたようだった。

昨年、運営が決定したグループごとに観光を行った結果グループ内で小さなトラブルが発生したことを受けてマネジメント方法を変更した。観光前日のSession 2 終了時、参加者全員を集め、「最低1人の運営、最低2カ国の学生、6-7名」を条件に自由にグループ作成、行先決定を行わせた。

このことにより、参加者同士が仲の良いもの同士で固まり、より幅広い学生と触れ合う機会が損なわれる可能性は否定の余地もない。しかし、少人数の運営メンバーで万が一に備えて連絡を欠かさぬようにしなければならない中で、当日の行程の円滑化・トラブル回避には成功したと考えている。

ただし、観光プログラムのテーマ性が失われたことは一つの大きなデメリットであり、次年度以降は自由度とテーマ性とのバランスをさらに吟味し、観光日を楽しみながらもより意義深いものとしてほしい。



3-1 年度活動報告

本会議のほかに、企業様のご協力のもと以下のようなイベントを開催した。

概要

イベント名：「地域を沸かせ！」



主催団体：GNLF

共催団体：NPO法人世界遺産アカデミー・株式会社マイナビ文化事業社

日程：2017年6月24日(土) 13:30~16:30

定員：30名

開催場所：パレスサイドビル2階 会議室

イベント詳細

タイムテーブル

13:30~13:45 開会式・趣旨説明

13:45~14:15 講師による講演

14:15~14:30 ウォーミングアップ

14:30~16:00 グループワーク・発表・

フィードバック

世界遺産登録のデメリットを克服して地域の資源として生かすための方策

16:00~16:30 総括・閉会



講師：

世界遺産アカデミー主任研究員
宮澤 光 様

世界遺産アカデミー理事挨拶：

三上 隆次 様

成果物

Group A

テーマ：『明治日本の産業革命遺産』



「産業遺産群」の「魅せ方」に着目して、物理的な見せ方や広報についての提案をした。一方で、壊れやすい産業遺産の保全・未だ稼働している部分への配慮などを懸念点として挙げた。

Group B

テーマ：『古都京都の文化財』京都一府に集まった17資産



人が住んでいる京都市内の遺産の「保全」に関する課題を整理した。寺社仏閣で入場料を取ることは信仰の拠り所としての役割を損ねる、どの部局が遺産保全のための資金を握っているのか確かではないなどの論点が挙がった。

4-1 2017年度GNLF学生本部総括

本年度のGNLFの活動は、団体理念、および運営方針の理念の再検討より出発した。グローバルリーダーに必要な素質としての「他者理解の精神」の涵養を本会議の第一義に掲げ、事業拡大から本会議の質的拡充へ方針を転換した。また、3学年から2学年による運営へ移行したことで、運営組織のあり方も大幅な刷新を迫られた。本項では、各局と全体マネジメントの立場から、本年度のGNLFの活動の特色と課題を総括する。

1. プログラム局

本年度のプログラムは参加学生間の価値観の差異あるいは共通点の発見に重点をおいている。その点において、今年度の本会議は提言作成等をゴールとした従来の本会議と比べ、意見対立が表面化し成功を納めた。一方で、そのような意見対立の基盤にあったのは、出身背景の差のみならず、ジェンダーという話題への理解度の差であったというのも事実であり、一部参加者からは不満の声が上がった。また、解決策の検討こそが国際社会に求められていることだが、そのような議論が少なかったことを疑問視する意見も寄せられた。他にも、扱った話題の狭さや自由時間の多さについて参加者間・運営間で評価が分かれた。全てを満たすプログラムを作ることができないのは自明であり、ある程度焦点を絞った作成方針は会議の質の向上だけでなく、準備の円滑化にも寄与するはずだ。来年度以降、より余裕を持って準備を進め、扱う素材や講演者を十分に吟味することが必要だが、メンバーシップ局と連携し、参加学生が事前にフォーラムの目的や雰囲気を理解した上で参加できるようコミュニケーションをとることも重要だと考える。

2. メンバーシップ局

やりとりの遅延、航空券・VISA取得時の混乱等、事務面でも反省すべき点はあるが、GNLFの今後を考える上で最大の課題は新規海外参加国の獲得と、かつて参加した国との関係の継続である。運営組織の卒業生や過去参加者の協力も不可欠だが、ぜひ参加したい、周囲に勧めたいと思われるようなプログラムを作成することが理想である。また今年度は在日留学生の参加を初めて受け入れた他、日本人参加者が運営の一端を担ってしまう問題の解決も図った。

3. 財務局

今年度最大の課題は運営体制の変化や理念見直しによる混乱に伴い、財団助成収入が減少したことへの対処であった。本会議予算は全体で昨年度比45%程度縮小し、その対処のため格安で利用できる国立青少年オリンピック記念センターを利用した他、海外参加者の参加費も引き上げた。予算縮小そのものは、団体の持続可能性や事業規模にあった適正予算・参加費、という観点からある意味歓迎すべき変化ではあったが、オリンピックセンターでの宿泊に関する参加者への配慮の不足という点では大きな課題が残った。

4.広報局

ホームページの大幅な刷新と内容拡充、定期的なブログ・SNS更新、本会議のコンセプトデザインの設計等、団体維持に関わる広報力の強化に精力的に努めた。例年、広報が片手間の事務となりやすい点を問題視し、一定の労力を年間を通じて広報に割り団体全体で担うことを目指した。本会議の参加者募集については昨年度と比べ大幅な成果をあげたが、団体知名度は高いとは言えず、広報戦略はなお洗練が必要である。

5.全体マネジメント

本会議前そして後に繋がる団体活動で大きな課題を残すのが、運営学生のリクルーティングと過去参加者のネットワーキングである。特に後者のネットワーキングに関しては、GNLF学生本部の上部組織である一般社団法人グローバル・ネクストリーダーズフォーラムの存在が形骸化しており、また昨年度海外の地域委員会が実質消滅したことから、新たな仕組みの検討が急がれる。また、本会議の準備においても、スケジュールとタスク管理の把握を誰が行うのか、決断はいつどのように下すのかという点が不明瞭であることが多く、ミーティングの活用法についてもさらに工夫したい。そして、参加学生だけでなく運営学生自身もGNLFの1年間の準備と、1週間の本番を心から楽しめるようにすることを目指したい。

4-2 ご連絡先

本報告書に関するお問い合わせは、下記GNLF学生本部連絡先までお願い致します。

住所

〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-6 アトラスビル6階 IBIC本郷内

公式ホームページ

<http://jp.g-nextleaders.net>

メールアドレス

gnlf-hq@g-nextleaders.net

団体Facebookページ

<https://www.facebook.com/GlobalNextLeadersForum/>

団体Twitter

[@GNLFjapan](https://twitter.com/GNLFjapan)

4-3 会計報告

収入の部

参加者負担			
参加国	参加費	人数	収入
キルギス	¥70,000	4	¥280,000
シンガポール	¥70,000	3	¥210,000
スロバキア	¥70,000	1	¥70,000
台湾	¥70,000	1	¥70,000
チュニジア	¥70,000	3	¥210,000
パキスタン	¥70,000	2	¥140,000
ハンガリー	¥70,000	2	¥140,000
ブラジル	¥70,000	3	¥210,000
フランス	¥70,000	1	¥70,000
ブルガリア	¥70,000	4	¥280,000
メキシコ	¥70,000	3	¥210,000
中国(在日留学生)	¥30,000	1	¥30,000
日本(一般参加)	¥30,000	6	¥180,000
日本(運営)	¥30,000	13	¥390,000
		小計	¥2,490,000

助成金収入		
財団名	収入	
独立行政法人 国際交流基金	¥600,000	
公益財団法人 双日国際交流財団	¥300,000	
公益財団法人 庭野平和財団	¥192,000	
	小計	¥1,092,000

企業協賛収入		
企業名	収入	
三菱商事株式会社	¥500,000	
日経カレッジカフェ	¥10,000	
	小計	¥510,000

寄付金収入		
団体名	収入	
一般社団法人 東大駒場友の会	¥220,000	
	小計	¥220,000

運営拠出金		
項目	収入	
運営拠出金	¥0	
	小計	¥0

当期収入合計(A)	¥4,312,000
前期繰越収支差額	¥664
収入合計(B)	¥4,312,664

当期収支差額 (A)-(C)	¥26,343
時期繰越収支差額 (A)-(C)	¥27,007

支出の部

旅費		
A.海外参加者渡航費		
参加国	費用	
キルギス	¥422,920	
シンガポール	¥140,262	
スロバキア	¥83,950	
台湾	¥41,748	
チュニジア	¥267,990	
パキスタン	¥187,844	
ハンガリー	¥126,880	
ブラジル	¥390,000	
フランス	¥112,708	
ブルガリア	¥423,960	
メキシコ	¥355,938	
	小計	¥2,554,200

B.日本国内旅費		
項目	費用	
成田空港出迎え・送り出し	¥26,500	
羽田出迎え	¥6,000	
	小計	¥32,500

食費・宿泊費		
A.宿泊費		
項目	費用	
オリンピックセンター(学生)	¥453,600	
オリンピックセンター(教授)	¥147,000	
風明館(学生)	¥453,600	
風明館(教授)	¥76,000	
	小計	¥1,130,200

B.食費		
項目	費用	
2/23昼食	¥43,120	
2/24昼食	¥26,880	
2/26昼食	¥26,880	
2/28昼食	¥34,300	
	小計	¥131,180

研修会場費		
項目	費用	
2/23 研修	¥71,280	
2/24 研修	¥7,600	
2/26 研修	¥6,500	
2/28 研修	¥6,500	
夜間研修	¥6,600	
文化交流会	¥135,100	
報告会	¥57,000	
	小計	¥290,580

雑費		
項目	費用	
備品	¥43,653	
講演者謝礼	¥45,000	
国際郵便	¥5,844	
資料費	¥52,500	
	小計	¥146,997
当期支出合計(C)	¥4,285,657	

付録：各セッションアンケート質問要項

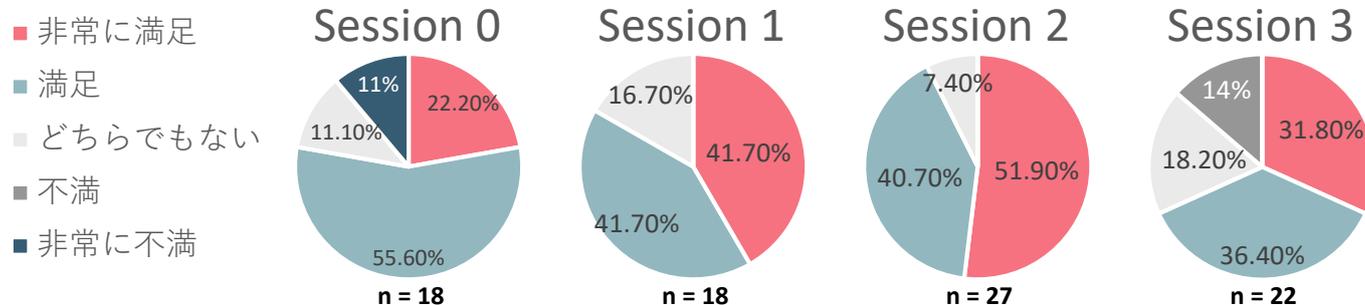
※コメントは一部抜粋

基本質問要項

*これらの質問はセッションに関する各アンケートに基本要項として含まれていました

- セッション内容についての満足度を教えてください
非常に満足/満足/どちらでもない/不満/非常に不満
- 上のような満足度になったのはなぜですか。(自由記述式)
- セッション運営についての満足度を教えてください
非常に満足/満足/どちらでもない/不満/非常に不満
- 上のような満足度になったのはなぜですか。(自由記述式)

セッション内容についての満足度



セッション運営についての満足度



セッション0-レディーファーストに関する議論-

- レディーファーストの文化に対するあなたの感情・考えは変化しましたか。
—いいえ。議論の以前と自分の意見は変わっていないが、レディーファーストのような文化がどう理解されるかについては前より意識的になった。
- あなたが深く賛成/反対するディスカッション中の議論を一つ取り上げてください。なぜその議論が重要だと感じたかを教えてください。
—いい人間としてあるための社会規範として“レディーファースト”を保つことには反対だ。セクシャルマイノリティを排除する二元論に基づいているうえに、助けを必要とする弱い存在の代表が女性であるという過度な一般化が働いている。
—レディーファーストという文化をより平等に、中立的にするために呼び方を変えるべきだという意見には賛成する。

セッション1-メディアとジェンダー-

- CM作成体験のワークショップについて考えるところがあれば教えてください。
 - 挑戦的で、面白くなおかつ誰も傷つけないように作成するのが難しかった。
- 梅田様の講演はどうでしたか。
 - 実際に広告業に所属する人から話を聞くことができたのは興味深かった。
 - メディアでさえもジェンダー問題にかかわっていることがわかった。
- このセッションを受けて、広告やCMとジェンダーの表象に関して思ったことを教えてください。
 - ジェンダー問題や性別役割分業の表象について考えるにあたって重要なテーマ設定であった。ほかの国々でどのようなCMがどのように受け入れられているのかを交換する時間がもっと欲しかった。

セッション2-ライフコースとジェンダー-

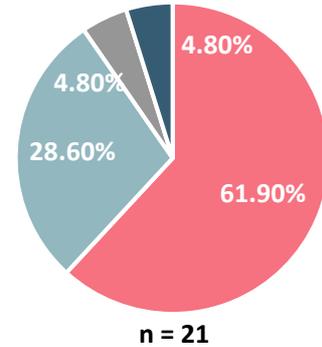
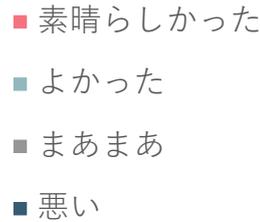
- これまでの人生についてのディスカッションはどうでしたか(複数回答可)
 - 楽しかった/刺激的だった/心地よくなかった/嫌な気持ちになった/
興味深かった/その他
- 午後に開かれた講演会はどうでしたか
 - 講演会の中での話題によって、日本の状況についてより理解することができた。
 - ごく普通の女性とは違う人生を語ってもらえたので非常に得る知識が多かった。
- 自身の今後の人生設計についてのフリートークの中心的な話題はなんでしたか
 - 労働と雇用(59.3%)/結婚(25.9%)/子育て/性別役割分業/その他
- このセッションであなたにとって新しかったこと、興味深かったことを教えてください
 - 1980年以降の日本の最新の状況について、個人の観点から語り聞かせてもらったのがよかった。
 - 互いの国の風潮や文化を知ることができた(多数)。

セッション3-ジェンダー問題の多様性-

- 他の価値観の異なる人と合意に至るにあたり何らかの困難はありましたか。
 - あった。世界の全く違う地域からきて全く違う価値観を持つ人々と合意に至るのは難しかった。しかし、フォーラムを通して、自分の観点から民族中心的に考えるのではなく、他者の視点から考えることを学んだ。
- 議論中、自分が未来の「グローバルリーダー」になる備えができていると感じましたか。もしそう思わなかったとしたらそれはなぜだと考えますか。
 - 自分がリーダーになるために必要なことをすべて知っているとは言えないが、こうして様々な人々と直接に話すことができたから何らかの判断を下せるようなひとにはなれていると思う。
 - 実践上の問題、実現可能性や手段があまり議題にされなかったので、まだ備えができているとは言えない。

会議全体

- フォーラムはどうでしたか
素晴らしかった
よかった
まあまあ
悪い



- 会議全体の印象を教えてください(自由記述式)

—国際的な視点は興味深かったし、ひとつのトピックをめぐって異なる見方を共有するのもよかった。しかし、もっと論争を生むような、深刻な話題が扱われてよかったし、解決策ベースの議論があってよかったと思う。

—異なる国の様々な人から話を聞いたのはよかったが、セッションで扱われた内容は入門的だった。

>[運営コメント]参加者に学部1年から院生までかなりの年齢差があり、人によっては内容を物足りなく感じている様子だった。また、センシティブな話題を意図して避けたのが一面ではトラブル回避に、反面では議論の浅さにつながった。

- フォーラムの良かったところを教えてください。(宿舎・セッション・食事など)

—宿泊施設がよく、ごはんも美味しかった(多数)。

—運営チームが頑張ってくれていた(多数)。

—グループワークやセッションが刺激的だった。

- フォーラムの良くなかったところを教えてください。(宿舎・セッション・食事など)

—個人シャワーの確保はもっと多数してほしい。

—運営チームがもっとトピックについて深く知ったうえでファシリテーションの練習もしてほしい。

—英語の堪能な講演者を呼んでほしい。

>[運営コメント]東京においてハラル対応の食事処、入浴場所を見つけるのは困難だが、参加者の満足度を大きく引き下げる要因になるので入念な準備が必要。

>[運営コメント]運営・講演者ともに日本のメンバーの英語力はネックとなりやすい。

- 何かフォーラムについて改善点の提案はありますか。

—フィールドワークを増やしてほしい。

—もっと講義・講演を聞いてこれまで知らなかったことを知りたい。

—事前課題を課して、来日前に議論の背景を共有しておけるとよい。

- 自由記述欄

—藤田創をはじめとする運営チームが、このように若いリーダーたちが声を発しより深く社会問題について考えられるような場を設けてくれたこと、自分たちが現状を変える力があると思うような体験をさせてくれたことに深く感謝します。

—参加者をまとめ、プログラムをよいものにしようと頑張ってくれてありがとう。

本会議はとても刺激かつ魅力的でした。